



紐

KUMIBITO

ひとつに
ひとつじ
ひと物語

No.2
2013
8月



美山のかぶとむしおじさん。

九頭竜川の支流が滲々と流れ、蝉の声が照りつける太陽を暑くする。山のふもとまで狸が顔を出し、どこかで虫捕り網を持った子どもたちの笑い声が聞こえる。そんな昔のあたりまえがそこにはあった。

美山地区間戸町。2,000匹はいるであろう土の中から、カブトムシの幼虫をごろごろと取り出しながら、今回の組人、東藤寛治さんは自称「かぶとむしおじさん」の名にふさわしい気取らない表情で私たちを迎えてくれた。

きのことカブトムシ。

カブトムシの生育には堆肥(=マット)がかかせない。彼らは生涯のほとんどをこのマットの中で過ごすからだ。東藤さんの本業であるひらたけ「美山しめじ」の栽培、これに使用した米ぬか、おがくず、生おからを混ぜ合わせた栄養たっぷりの堆肥が、カブトムシにとってはごちそうである。メスはその堆肥に潜り込み卵を産みつける。幼虫は堆肥や朽木を食べて成長し、ある程度育つと脱皮をする。冬を越した幼虫は10cmほどにまでなるという。その後、堆肥中に蛹室を作り、そこで3回目の脱皮をして蛹になる。ついには6月頃、褐色に色付いた硬い羽根を大きく広げて、夜空に一斉に飛び立つのだ。

「商売と思ってあくせくとするとダメ、好きだから続けられたんだ」。

カブトムシはあくまで趣味の延長だという東藤さんにとって、多彩な設備を武器に一年中フル稼働するひらたけ栽培が、自分に責任のある「子」なら、カブトムシはさしずめ、かわいくてしょうがない「孫」といったところだろう。

生きる、を育てる。

「昔はそこらに居てつかまえるものやったのにな」孫を連れてくるおじいちゃんが嘆くという。

最近は採るのではなく、買ってくる昆虫となってしまったカブトムシ。戦後の拡大造林によるスギ林の中でひとときわ明るい緑のナラの木を眺めながら、かぶとむしおじさんは最後にこう伝えてくれた。「子どもたちにはカブトムシを育てることで、命の変化、つながりを感じてほしい。そこには身近な生と死があり、その大切に触れてほしい」。

先ほどまで掘り返されていた幼虫たちが生き生きと土の中に潜り込んでいた。



三世代の笑顔が見たい、

それが私の喜びです。



美山かぶと普及会
東藤寛治
(53歳)
信条:誠実
写真:高橋正勝
取材:宮本隆行

大 一 印 刷 ス タ ッ フ の 独 り 言 感 動 し た 話

営業 道 傳 大 介 夏 の 出 来 事 ...

あれは僕が20歳くらいの頃、某海水浴場へ遊びに行ったときの出来事です。当時、若かった事もあり決められた駐車場ではなく「海の家」の真横に車を停めてしまいました。

夕方頃にエンジンをかけた瞬間…ん？えっ？車が全く動きません。外に出てみるとタイヤ全体が砂の中に埋まり、身動きが取れない状態になっていました。その場でジタバタしていると、いつの間にか僕たちの周りには多くのギャラリーが集まりはじめていました。「ああ～恥ずかしい…」そう思った時です。集まってきた人たちが砂に穴を掘りはじめ、車を押ししてくれたのです。「見ず知らずの人たちが僕なんかを助けてくれるなんて…(感動)」。振り返ればあの出来事以来…僕も少しだけ人に優しくなれたような気がします。



制 作 今 井 真 也 英 雄 ピ ク シ ー

私は感動した本を紹介します。

現在は名古屋グランパスの監督をしているストイコビッチの現役時代を描いた作品、木村元彦著「誇りドラガン・ストイコビッチの軌跡」です。

母国ユーゴスラビアの内戦、代表チームの国際試合出場停止、所属チームの八百長発覚…。そんなヨーロッパから逃げるように日本に来た彼を待っていたのは、理不尽な判定と無能な監督、低迷するチームでした。様々な苦難を乗り越える彼の生き方は、多くの人の共感を呼びました(私もその1人です)。

本書はベストセラー「オシムの言葉」で知られる木村元彦のデビュー作です。他に「悪者見参」なども名作でおおすすめです。



製 造 三 崎 晃 司 僕 の “ た か ら も の ”

我が家には私そっくりの息子が二人います。

長男は「お喋りも達者な、やんちゃ盛り」の三歳児。最近では一人で包丁を握り夕食の手伝いをするまでに成長。次男は“ウーウー、アーアツ”と意思表示をし始めた笑顔の耐えない九ヶ月児。ようやくお座りが出来るようになり、保育園では色んなお友達と遊ぶまでに成長。

そんな僕の一日は、子供にご飯を食べさせ保育園まで送って行くことから始まります。帰宅後は、部屋の掃除をしてご飯を食べさせ、二人をお風呂へ…これが毎日のサイクルです。これって当たり前で平凡な日々なのかも知れませんが、でも私の気づかない所で大きな成長をしている息子たちを発見し、ささやかな感動を「妻と共有」することが私の毎日の楽しみです。





子どもと水族館

人口あたりの水族館の数が世界1位の日本。そして福井が誇る水族館と言えば越前松島水族館。福井の人なら一度は訪れたことがあるはずのスポットに、数年ぶりに行ってきました。

施設内の数あるイベントの中でも、やはりメインはイルカショー。3匹のイルカが飼育員との息もピッタリにダイナミックなジャンプなどを披露します。20分程度のショーの間、集中力を欠かさず完璧にシゴトをこなすイルカを見て、『毎日同じ事で注意されるウチの子よりも偉い...』と誤ってしまいました。

ふと客席を見ると、子ども連れやカップルの他にも車いすのお年寄りをはじめ年配の方が多く事に驚きます。1959年に開館したという歴史を感じる館内は、色々な建物が継ぎ足しというか点々と増設されている印象でしたが、とてもアットホームな雰囲気、生きものに触れられる工夫も多くありました。親子3代に愛されてきた理由が少し解ったような気がしました。次に行く時にはまた新しい見どころが増えているかもしれません。天気が良ければ、海岸で小さな生きものを直接観察するのもオススメです。(お弁当を広げるときは鳶に注意して下さい。私は襲われそうになりました)



印刷にまつわるエトセトラ

低予算でもアイデア次第で インパクトのあるプログラムに大変身!

今回ご紹介するのは、7月20日に福井市酒生地区で開催された「酒生遺跡祭り」の実行委員会様よりご注文頂いたお祭りのプログラムです。

オモテ面には祭りのプログラムや抽選券・バスの時刻表などをデザインし、ウラ面にはスポンサー名を入れて欲しいというオファーでした(サイズはB3)。

まず制作する上で「インパクト」と「保存性」に重点を置きました。やはり地域のお祭りの主役は子供達です。紙帽子の状態でご家庭に配布し、当日紙帽子をかぶって来場してもらうような「しかけ」を付けることで上記2点をカバーできるようなプログラムが完成したのではないかと思います。

地域のお祭りや運動会のプログラム制作でお困りのことがありましたら弊社まで何なりとお問い合わせ下さい。



編集後記

今月は自称「カブトムシ☆おじさん」取材させて頂き、久しぶりにカブトムシに触れてきました。カブトムシの想い出といえば、「誰よりも早く」秘密の場所」に辿り着きたくて夜明け前の山中を駆け回っていた...」そんな少年時代の出来事を思い出します。美山地区間戸町、そこには幼い頃の想い出が瞬時に蘇るような懐かしい空間と真っ青な空が広がっていました。この夏、お子さんやお孫さんと一緒に自然体験をさせてみるのもイイかもしれませんよ

前田

スタッフによるココだけ情報満載!



<http://www.bigone-p.com/blog/>